

# 中世荘園の莊務執行とその請負主体

—院政期の沙汰人をめぐって—

高橋 一 樹

はじめに

中世における荘園支配の根幹をなす年貢・公事等の賦課・徴収や検注といった諸権能は、莊務権と表現されている。<sup>①</sup> 中世成立期のそうした莊務の具体的な執行のあり方は、これまで関連史料の豊富な畿内近国の寺領荘園を素材に論じられるのみで、十二世紀に数多く新立される王家領や摂関家領の中世荘園については研究が進展していない。それは史料の残存度だけでなく、王家領や摂関家領の荘園を「寄進地系荘園」と概念化する旧来の通説的理解と深く関わっている。

そもそも「寄進地系荘園」概念は、在地領主を起点とした所領寄進の連鎖によって荘園の成立を説くもので、寄進を軸とした成立経緯に規定されて重層的な領有体系をもつとされている。すなわち、

王家領・(寄進)領家職—(寄進)預所職—(在地領主)下司職

というように、下からの寄進と上からの補任にもとづき、権門・中央貴族から在地領主までが身分制的に編成された「職」の領有者として位置づけられている(いわゆる「職の体系」)。そして、本家ないし領

家が国衙の得分や諸権限を分割継承した莊務権を保持しつつも、現実の荘園支配の局面では職の補任を通じて下司<sup>②</sup>在地領主や公文の力量に依存するというように、「職の体系」は中央貴族と在地領主が互いに補完しあう荘園支配のシステムとして実体的にとらえられてきた。<sup>③</sup> 荘園研究における個々の史料分析もこれにもとづき行われてきたといえてよい。

しかし、荘園成立史をめぐる近年の研究は、「寄進地系荘園」における「寄進<sup>④</sup>立荘」という根本的な図式を崩し、所領寄進に解消されない立荘の独自性を明らかにしている。<sup>⑤</sup> これにともなって、寄進の論理に立脚した「職の体系」も再検討がもとめられているといえよう。本稿はこうした視点に立って、「職の体系」にかわる新たな荘園支配システム像を構築する作業のひとつとして、荘園領主の保持する莊務権の執行形態を請負主体に着目しながら分析するものである。とりわけ立荘時に国領等を包摂した複合的莊域構成を重視する私見にもとづき、近年の朝廷財政・知行国支配に関する研究とのリンクも視野に入れた論を進めることにしたい。

## 一 莊務権とその執行に関する研究史

ながら通説の位置をしめてきた「寄進地系荘園」概念は、中田<sup>3</sup>氏の古典学説を出発点に永原慶二氏が再構成したものである。永原氏は、中田学説の根幹にあった在地領主の得分からの上分取得者＝莊園領主という理解を否定し、莊園領主の得分や権限が国衙のそれを分割継承していることを明らかにした。そして、これを莊務権とよび、その内容を年貢賦課・徴収、検注、臨時課役賦課などと規定したうえで、莊務権が本家にある場合と領家にある場合とに分類している。この二つのパターンが生ずる理由は、本家・領家間の寄進契約の差異にもとめられ、王家領や摂関家領では領家の中央貴族が莊務権を留保して得分のみを本家に寄進する「本家（職）寄進」が基本形とされた。

これに対し横道雄<sup>4</sup>氏は、院政期における王家領（横氏は院領とする）の立荘関係文書の検討から、「院領本家」「院領預所」「院領下司」の概念を新たに提起し、莊務権はつねに「院領本家」にあり、その近臣たる貴族（領家）が「院領預所」として莊務を請け負い、さらに「院領下司」などの下級所職保持者がそれ執行すると主張した。そして、五味彦彦<sup>5</sup>氏の「下司級領主」「公文級領主」の概念設定を継承して、「院領下司」は厳密な在地領主ではなく中央の下級官人などであったとしている。

横氏による批判の中心は、おもに院政期における「預所職」の具体

的な用例分析を通じて、「職の体系」における本家―領家―預所という関係が厳密なタテの系列ではないことを主張する点にある。しかし、領家がときに本家の預所職として莊務にあたるという事実はすでに中田<sup>3</sup>氏も指摘しており、横氏の独自の見解ではない。また、横氏は「寄進地系荘園」概念と同様に職の成立経緯を下からの重層した寄進にもとめ、中央貴族が領有する既存の荘園からの上分寄進（本家職の設定）により王家領が成立すると思われるため、「院領本家」「院領預所」などの概念を新たに設定する必要があるため、のちに述べるように王家や摂関家が主導権をもち立荘する中世荘園の莊務権をもつのは当然であり、不要な概念設定の上に立った本家の莊務権保持の強調は単なる現象面の指摘に過ぎない。横氏の批判は「職の体系」論の部分修正といわざるを得ないのである。

院政期における王家領や摂関家領の立荘文書を丹念に読んでいくと、①所領を寄進した貴族たちの寄進状には立荘後の預所職への補任と莊務執行をもとめる文言が必ず存在する。そして、②預所職に補任された人物は、莊園領主である院・女院ないし摂関家から莊務を預かり、それを執行することが命じられている。莊務権が基本的に莊園領主たる王家・摂関家に帰属することは明らかである。また、個々の史料解釈をねじ曲げて「職の体系」論と整合させるために、史料上にみえる「預所職」の実態を領家職とするような叙述はさすがに少なくなり、中央貴族が中世荘園の立荘時から預所職を知行する事例もようやく一般的に認識されるようになってきた。しかし、より重要な問題は、従来

の「寄進地系荘園」概念や「職の体系」論にかわる中世荘園の成立構造や支配体系を新たに組み立て、そこに①②の現象を正當に位置づけることであろう。

最近の川端新氏<sup>⑦</sup>による立荘研究は、まさにこの作業を着実に進めようとするものであった。川端氏によって、王家や摂関家の側が主導権をもつ立荘時からの中世荘園における支配体系は、

本家（王家・摂関家）―領家―預所職―下司職

と図式化され、「職の体系」論とは異なる史料分析の方法が開拓されつつあったといえる。ただし川端氏の議論にあっても、中世荘園における具体的な荘務の執行やそれにとまなう得分の取得が所職の保有者で完結するという意味では、「職の体系」と同じ立論という批判もまぬがれない。法金剛院領越前国河和田荘の預所美濃局が「以当預所使者、令荘務執行、可全寺役之由」を後白河院庁に申し入れているように、本家―預所職という形式のもとで実際に荘務を処理した「使者」のような存在に注目し、その実態を深く掘り下げることが必要と考える。このような観点から従来の研究をふりかえると、院・女院や摂関家の家政機関たる院・女院庁や政所の構成員が使者として派遣され、荘務に關与することが注目されてきた。すなわち、保立道久氏<sup>⑧</sup>は院・女院領荘園の荘務が院庁・女院庁に組織された下級官人の都鄙間交通によって実現されるという見通しを述べ、かれらを「荘務幹部」と名付けた。さらに井原今朝男氏<sup>⑨</sup>は、摂関家領・王家領に派遣される殿下御使・院使を網羅的に検討して、「職の体系」における預所―下司お

よび公文（荘官）という系列とは別に、年貢収納や検注などの荘務が御使によって処理されていたとする。

保立氏と井原氏の研究は、それぞれ王家と摂関家を主たる分析対象として、院・女院や摂関家の家政機関に組織された中央下級官人と具体的な荘務執行との関係を指摘しつつ、王家や摂関家による主体的な荘園設立とその編成原理、経営実態の追究をめざしたものであり、いくつかの論点の提起とともに批判的に継承すべき視角といえる。

ただし保立氏の議論においては、①都鄙間交通の国衙ルートと荘園ルートの重複関係が強調されながら荘園制成立期の分析は両者の並列的な二本立てであり、②文官型の類型を中心に「荘務幹部」を院・女院の家政機関に直接結びつける点など、疑問とすべき点も少なくない。そしてなにより、荘園制成立史の理論的枠組みとして維持されてきた「寄進地系荘園」概念や「職の体系」論の克服をめざしながら、それらとの研究史的な関係がみえにくくなっている。また、「職の体系」を前提にそれと御使論を安易に接合させようとする井原氏の見解にも大きな問題点がある。私見では、保立氏や井原氏のように「荘務幹部」や殿下御使の機能を強調する以前に、日常的な荘務執行では預所職を知行する貴族などと現地をつなぐ「沙汰人」がおり、この系列が荘務執行の一次的な関係として重視されなければならないと考える。その点をまず、荘務内容の中核に位置する年貢に關して具体的な史料から確認しておきたい。

【史料1】国立歴史民俗博物館所蔵高山寺文書（『中世の武家文書』）

兵庫御庄御年貢事、沙汰人申状折紙進覽之、損亡之条暗令申候、無謂候歟、仍可被下 院使之由、先日内々令申入候了、而不蒙分明仰候、可申驚之由相存候之処、大乗会料米事被仰下候、尤恐思給候、早御使可令沙汰下給候也、恐々謹言、

□月廿三日

沙弥重蓮

文治元年(一一八五)から二年にかけて、八条院領の兵庫莊を知行する沙弥重蓮こと平頼盛が、年貢に関して「沙汰人申状折紙」を副えて八条院庁に送った書状である。莊園の損亡を訴えてきた沙汰人の文書をもとに、預所職を知行する頼盛が院使の派遣をもとめており、女院庁は独自に御使を派遣しているのではない。また、兵庫莊では大乗会米の賦課をめぐる問題が生じていたようであるが、そうした一國平均役の賦課や納入に関する莊務について、鎌倉前期の事例であるがつぎの史料をみてみよう。

【史料2】「民経記」寛喜三年十月記紙背文書(大日本古記録)

豊高庄事、相尋二條中納言候之処、沙汰人申状如此、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

十二月九日

少弁光俊

謹上 右中弁殿

承久二年(一二二〇)の大内裏再建時に伊賀國豊高莊へ賦課された造営費用に関して、行事所が預所職の知行者とみられる二條中納言に問い合わせたところ、その返答は「沙汰人申状」でなされてきた。一國平均役の賦課・納入でも預所―沙汰人の莊務組織が対処し、とくに

沙汰人が実務を掌握していたことがわかる。なお、『民経記』紙背文書の承久二年大内裏造営關係文書には、折紙形式の沙汰人申状の原本が含まれている。

【史料3】「民経記」寛喜三年十月記紙背文書(大日本古記録)

支子御庄沙汰人沙弥定西謹言上

被充催役夫工用途米未進九斗九升事

□件子細者、建永以後田数之減、

□町五段地頭給田分

□町地頭押領分下司名田也

五段半会賀福地兼百姓仮彼号不進濟

□町五段半河成

已上、無足分五斗六升也、今所殘未濟四斗三升者、建永之時所濟以錢一百文二斗之代被納了、仍百姓等守其旨致沙汰之処、今度以錢□百文一斗之代被納云々、仍此分未濟出来之間、如建永不能究濟、早政所御使庄家下給テ、□□□□□□

□□地頭張行之間、私催一切不合期、此旨先度申上候之処、可被仰下關東、可進解狀之由重被仰下、早可進解狀候者也、仍言上如件、

河内國支子莊は殿下渡領で役夫工米の未進について詳細な事実關係を把握しているのは沙汰人(沙弥定西)であった。かれは建永の賦課時と異なる今回の未濟理由を具体的に説明して、政所御使(殿下御使)の下向を要請している。ここでも預所―沙汰人から要請をうけてはじ

めて御使が下向することがわかる。

その御使派遣であるが、井原氏自身も史料に散見される「御使繁多」の語をふまえて指摘するように、院使や殿下御使の下向には供給雑事の負担が大きく、荘園現地ではむしろ敬遠されていた<sup>①</sup>。井原氏の掲げた御使の事例表に即していえば、王家領ではとくに御使の下向は立荘沙汰がほとんどで、他は史料1・3のように預所職を知行する領家が派遣依頼をした場合に限られている。院使や殿下御使の派遣は預所—沙汰人の荘務組織を補完する二次的なものといわざるを得ない。

中世荘園の沙汰人については、早く中田薫氏が荘務組織の検討を行なうなかで、下司・公文・田所・惣追捕使などの荘官の異称として取り上げていた。近年はこの「荘官の異称」という単純な理解を脱して、久留島典子・酒井紀美氏が中世後期の荘園支配とそれに対する在地構造の分析において注目し、豊かな成果を生みだしてきた。また久留島氏が課題として挙げていた中世前期の沙汰人についても、蔵持重裕氏が鎌倉期の太良荘を舞台に在地秩序を体现する古老住人との重なりを指摘している。

たしかに院政期からの荘園関係史料には「御庄沙汰人」「沙汰人」が登場し、なかでも荘園現地との深い関係をしめす「地下沙汰人」「在国沙汰人」「庄家沙汰人」などの表現が数多くみられる。ただし、阿波国名西河北荘では徳大寺左大臣家の「沙汰人通清」が二十年も在国し「時々雖上洛、無程又下向」していたり、摂関家々司の大膳大夫平信業が駿河国の荘園知行で郎従を「沙汰者」として往来させているよ

うに、荘園現地の住人ではなく都鄙間を往復する沙汰人もいる。さらに「在京沙汰人」という表現もあり、現地支配よりも荘園領主との関係性を重視すべき沙汰人の存在が想定できる。これまでにみえた史料1・3の沙汰人はいずれも、この「在京沙汰人」の範疇に属するものと考えられる。

そこで以下、おもに京都で活動し必要に応じて荘園現地とのあいだを往来する、この在京沙汰人と荘務との関係について論じることしたい(以下、在京沙汰人を単に沙汰人と表記する)。

## 二 沙汰人の荘務執行

院政期における王家領荘園の沙汰人については、六条院領伊賀国韮田荘の立荘に尽力し預所職を得たと考えられる平正盛が、郎等の平家貞を「沙汰人」として荘務にあたらせた事例がよく知られている。田中文英氏はこの預所—沙汰人という荘園支配の系列を当該期の一般例と評価したうえで、韮田荘でそれが武士団の権力組織によって実現される点に特質をみだしている。ただし、田中氏が「当時一般の」「荘園支配の機構」と評価するような預所—沙汰人の研究はこれまでにないといいたい。そこで、同じく院政期の王家領荘園における預所—沙汰人という荘務組織を典型的に示す事例をさがすと、つぎの史料が注目される。

【史料4】「医心方」紙背文書(『平安遺文』二二〇七号)

「不用也」

額田御庄寄人等解 申進申文事

依実注進御服綿・御地子米代八丈絹并雜事子細□

副進注文一通

右、御服綿・三斗米代八丈絹、雖有限進濟期、前預所相模前司於御服綿者、調儲可相待沙汰人下向□由、所被仰下也、随相待沙汰人下向之処、今亦有仰、仍相待沙汰人、御服年貢可令進濟也、御庄所□并有様子細注別紙之所進上也、抑御庄立券当□於年貢御服者、可依本 院御庄例之由、雖被仰下、預所相模前司非例有其数、為訴無裁許過□、於今者為蒙裁定、注子細、言上如件、以解、

大治二年八月廿八日

番頭等

三国豊□

江沼正□

紀 貞国

物部依□

足羽吉□

平 国時

江沼依□

平 助道

別 包任

大江公政

案主大江経□

大治二年（一二二七）に加賀国額田莊の寄人たちが年貢納入などをめぐって留守所の目代に提出したと考えられる申状である。これによると、額田莊の年貢御服や八丈絹（三斗米のかわり）の收納は、預所の派遣する「沙汰人」が下向して行われることになっていた。

額田莊は白河院庁分の王家領莊園で代々の知行国主・国守の側近が預所職を知行しており、この当時の預所は相模前司という国司クラスの中央貴族である。沙汰人はこの預所のもとで京都と現地を往反して年貢の收納などにあたっていたことがわかる。そして、寄人たちが預所相模前司の「非例」を糾弾するために主張しているように、額田莊の年貢である御服の納入については、立莊当初から「本院御庄例」に依拠することが指示されており、各地の「院御庄」（院御領）から院庁に年貢物等を納入する際の済例が確立していたことも知られる。沙汰人は当然にこの済例を熟知している人物であった。

では、摂関家領莊園の沙汰人についてはどうか。注目したのは、井原今朝男氏<sup>⑧</sup>によって摂関家領莊園の「預所」の職務を示すとされた、「行親記」紙背文書中のつぎの史料である。

【史料5】「行親記」紙背文書（『平安遺文』四七四四号）

太田御庄御年貢細美布且随到来、所令進上候也、経御覽鹿悪布者可返給候也、定寛不知先例候、田堵等前々如此候之由、令申候者、今度以御教書之旨可仰下候也、又依先日仰、香色多々可染進之由、令下知候、今度人夫於途中相逢□云々、仍不進其請文候歟、遂參上之時、可令言上候、且以此旨、可然之様御沙汰可候、恐々謹言、

七月三日

僧定寛

【史料6】『行親記』紙背文書〔平安遺文〕四七四五号

謹請

仰事

右、大田御庄細美布、去々年於宇治殿經御覽候之處、似往年之所進、可然之事、可改直之由、蒙御定候之間、去□依大洪水、麻苧之類皆悉流損候云々、仍及歳暮遅濟、以所進□、先令□納候了、於今者無仰以前、作進京都、於□惡者、可返遣之由、兼所令下知□也、且以此旨、差脚力、可仰遣候、□意事同承候了、定寛恐□謹言、

□月□日

僧定寛

【史料7】『行親記』紙背文書〔平安遺文〕四七四六号

依先日之召、白布拾段謹進上之候、御懺法可動之用途已尽、不副今十段候之条、尤遺恨候、今朝信濃御年貢可来之由、承之候、若延引候者、追可進上候也、謹言、

九月十日

定寛上

『行親記』は撰関家々司の平信範が書写したとされ、その際に紙背を二次利用された文書は保延六年（一一四〇）〜仁平二年（一一五二）ころまでのもの。井原今朝男氏は史料5〜7が高陽院御倉町別当としての平信範に宛てたものであり、信濃国大田荘の年貢が御倉沙汰として同別当の管轄下にあったことを確認したうえで、つぎの点を指摘する。すなわち、差出人の定寛は大田荘の「預所」で在京して年貢収納

の請負者的職務に従事しており、莊務権を保持する撰関家Ⅱ「領家」と莊園現地とを媒介する職務に従事していた。この理解は佐藤健治氏の研究にも継承され現在にいたっている。

しかし、井原氏が僧定寛を「預所」とするのは、「職の体系」論にもとづくものであって、そうした史料の分析方法じたいが誤りである。その証拠に、井原氏はまったく同じ時期の同じ大田荘に関するつぎの史料にも着目しながら、右の一連の史料と整合した解釈を行うことができていない。

【史料8】『兵範記』仁平二年十二月八日条

八日戊辰、早旦參仁和寺勝功德院、今日故宮御忌日、依女院仰、為奉行御仏事也、彼御堂作法毎事如去年、先有日来御懺法結願、（中略）晩頭事訖、有例時云々、非時八具、為大田・大嶋両庄所課、宗長調進之、

井原氏や佐藤氏も指摘するように、「非時八具」を信濃国大田荘・越後国大嶋荘の所課として前下野守藤原宗長に調進させたことを示す記事である。宗長は大田荘と大嶋荘の預所職に補任されていたことがわかる。藤原宗長が大田荘の預所である以上、同時期の僧定寛は大田荘の預所ではありえない。僧定寛の素性は判然としないが、むしろかれは撰関家々司藤原宗長のような預所のもとで実際に莊務を執行する沙汰人であり、井原氏や佐藤氏が「預所の職務」とした前述の内容は沙汰人の職務と考えるべきであろう。

大田荘の預所―沙汰人についてこのようみると、保元の乱の戦

後処理と撰閥家領莊園群の処置に関するつぎの史料が注目されてくる。

【史料10】『兵範記』保元元年七月十九日・二十日・二十三日条

十九日 佐保殿・方上庄可奉行由、被仰資長了、

二十日 自入道殿被渡献御庄領目録、本御処分近年変改所々并高

陽院御庄々都及百余所、件御庄園依入道殿知行、混合左

府所領可被没官、為遁其難、併被献云々、

下官奉仰注申御庄々子細、又有奉行下知等事、本預人々

多有改定云々、

二十三日 今日、御庄園奉行人多改定、被仰新沙汰人了、下官成

賜政所下文了、

まず十九日条をみると、撰閥家々司の藤原資長に佐保殿荘と方上荘を奉行すべきことが命じられている。撰閥家領莊園では預所職に補任された家司などを院政期から「奉行人」とも呼んでおり、たとえば仁安元年（一一六六）に三河国志貴荘下條を「可知行由」の連絡をうけた平信範は「下官当奉行」と表現して喜んでゐるし、元久元年（一二〇四）の九条兼実讓狀などにも「奉行人」の表現がみえる。したがって二十日条の「本預人々」と二十三日条の「御庄園奉行人」は同義であり、それとは区別される「沙汰人」の存在が二十三日条から確認できる。

平信範が預所＝奉行人の改定のみならず新たな「沙汰人」についてわざわざ日記に筆記したのも、御倉別当の職務から信濃国大田荘の沙汰人である定寛と年貢布の所課をめぐって直接やりとりしていたよう

に、撰閥家家政の中枢部を担う信範ならではの實務経験と興味関心にもとづくものといえよう。預所（その多くは撰閥家々司）のもとで沙汰人が莊務を請け負うシステムは信濃国大田荘の特殊例ではなく、撰閥家領莊園の一般的な存在として指摘できるのである。

以上、本章では王家領や撰閥家領の中世莊園における沙汰人の莊務執行システムの存在を確認した。これをふまえて、次章では沙汰人の職務を担う人々の実態やかれらによる年貢請負について検討しよう。

### 三 沙汰人による年貢請負・立替システム

沙汰人の実態を明確にするために、まずは別稿でふれた備前国通生荘の沙汰人について掘り下げてみよう。

通生荘は皇嘉門院領で十二世紀末葉は撰閥家々司の藤原忠親が知行していた。治承三年（一一七九）六月に嚴島社を参詣する後白河院の一行が通生荘を通過することになり、忠親は同荘の「本庄沙汰人」造酒正祐安真人と「新庄沙汰人」九条院藏人大夫光仲を現地に派遣して、雜事奉仕の指揮にあたらせている。立荘形態に規定された通生荘の本庄・新庄という内部構造に即して沙汰人を起用していたことがわかる。

ところで、本庄沙汰人の造酒正祐安真人は大外記頼業の弟で、造酒正をながらく務めるかたわら、兄頼業と藏人头藤原忠親の仲介・連絡役を主たる職務として忠親の家司を兼ねていた。また、新庄沙汰人の九条院藏人大夫光仲は大内記孝範の兄弟、同じく大内記光兼の父で、



『山槐記』治承三年二月八日条の記事に春日祭の前驅のひとりとして登場する。両者ともに文筆を家業とする中央下級官人で、権門に仕えながら受領への巡任を待つあいだに目代や国雜掌を歴任する目代層といえる。

沙汰人をつとめる下級官人の「家」という点では、勸修寺流の藤原経房が知行する出雲国園山荘の事例が興味深い。経房の日記『吉記』につきのような記事がみえる。

【史料11】『吉記』寿永元年八月四日条

去月廿日前馬允以親下遣雲州園山莊、用海路、而於高砂逢惡風、繼子童・所從四人死去、以親并所從五人纔存命之由、上脚力、未曾有事也、

経房は園山莊に前馬允以親を派遣したが、海路の途中で惡風にあい大變な被害をうけた。前馬允以親は中原以親で、かつて内膳典膳をつとめたこともある中央下級官人である。以親には「童」のときから決まった「繼子」がおり、少なくとも所從九人を抱える「家」を確立していたことが読みとれる。そして、園山莊の沙汰人としてまさに「家」をあげて莊務を請け負っていたと考えられる。

伊賀国鞆田莊の預所―沙汰人を構成した平正盛と平家貞のように、伊勢平氏Ⅱ軍事貴族が預所職を知行する場合は、沙汰人に郎等・家人など主従関係にある者を起用することがみられることはすでにふれた。しかし、『愚管抄』には大舍人允宗親が「頼盛入道ガモトニツカヒテ、駿河ノ大岡ノ牧ト云所ヲシラセケリ」とあり、同じ伊勢平氏でも頼盛

の場合は下級官人を沙汰人としている。そして、これまでにみてきた一般貴族が預所職を知行する莊園の場合には、沙汰人をつとめる中央下級官人が預所の家政機関から相対的に独立した「家」として莊務を請け負っている。預所―沙汰人という莊務組織の性格を考えるうえで、これはきわめて重要であるが、さらにこの点を年貢未進が発生した場合で確認してみよう。

前章でふれた摂関家領の信濃国大田莊では、摂関家御倉別当との直接交渉を含めた沙汰人の年貢の請負・立替システムが確認できたが、この関係は王家領莊園についても検証することができる。院政期では丹波国六人部莊の事例がもっとも詳しい。

【史料12】九条家文書『平安遺文』補三〇三号

平資基解 申進上親父故散位平朝臣資孝私領屋地券文事

合屋地直能米參佰柒拾伍斛内

地壹戸主余拾玖丈肆尺參寸直二百卅五石

東西六丈五尺五寸 南北十丈六尺

在左京七條二坊一町内西三行北七八門内

屋等直百五十石内

壹宇五間二面寢殿 直八十石

壹宇三間二面廊 直四十石

壹宇三間二面雜舍 直十五石

壹宇三間一面車宿 直十五石

右、件屋地元者、親父故資孝朝臣私領也、而資孝沙汰丹波国六人

部御庄御米未進六十石・相模國御任時官物未進千五百九石并能米  
千伍佰陸拾玖石之内、以件屋地直三百七十五石・他物等直百九十  
二石、已上五百六十七石補弁進了、残仟貳石也、仍於本券相副新  
券文、限永年、所進上信濃守殿之如件、以解、

大治三年六月 日

平 (花押)

平氏

後家内蔵

「しなの、かみの殿にやちたてまつりおわりぬ、おなし□□にた  
てまつり□□□、」

平資基が亡父資孝の負債として信濃守に進上した京内家地の券文で  
ある。信濃守（もと相模守）は白河院の近臣として知られる藤原盛重  
で、「下総国目代之職」などを歴任した平資孝は盛重の相模守任中に  
同国の目代となり、請け負っていた官物を完済できずに負債となった。  
この点はすでに飯沼賢司・棚橋光男・川端新氏が指摘しているところ  
である。ところが史料12にあるとおり、資孝の負債には六人部莊を  
「沙汰」したときの「御米未進」もあった。これは、白河院から預所  
職に補任され六人部莊を知行していた盛重のもとで、やはり資孝が沙  
汰人として莊園年貢を請け負った結果と考える。預所の藤原盛重と沙  
汰人の平資孝の関係は、未進が発生すれば負物に転化する請負関係な  
のである。そして、平資孝のように国衙目代としての官物請負と中世  
莊園の年貢請負が同じ中央下級官人によって行われていたことも知ら  
れる。

中世前期を中心に中央下級官人の動向を詳細にあとづけた本郷恵子  
氏は、かれらの金融業者の性格を指摘し、国衙の目代や国雜掌などの  
活動がその裏付けをなしたと述べる。しかし、国衙財政との関係を強  
調するのは一面的であって、中央官人たちの金融業者的活動は中世莊  
園の沙汰人としての年貢請負によっても支えられていたのである。そ  
うした構造をよく示す具体例として、越前国榎富莊の事例をみてみよ  
う。

【史料13】高野山安養院所藏普賢延命法紙背文書（鎌倉遺文）

一六三九号

進上 家地并領田等事

合

一、家地

参間参面屋式宇内雑倉壹宇

敷地壹処

在醍醐越智陸町内伍段畠中敷地也

四至并丈尺見本文書等

一、田地式町式段参佰步

在和泉国 券文参通

一通 田壹町参佰步券文柒枚

四至仟佰見文書等

一通 田壹町券文肆枚

四至見文書等

四至見文書等

右、件家地并私領田等、惟光年来之所領

「榎富御庄等知行之間、依有未進、所蒙謹責□、仍相副本文書等、限永代進上如件、以解、

建永元年九月廿五日

藤原 在判

榎富庄などの「知行」を通じて未進を累積し謹責をうけた藤原惟光が、建永元年（一二〇六）に負物代として醍醐の家地や和泉国内の所領田地の券文を進上したものである。この間の事実経過を詳しく綴った文書によると、榎富庄は後白河院の女子である殷富門院の庁分荘園で、女院に仕える民部卿局が預所職を与えられ、さらに局の乳父である「外記入道」が莊務を預った。すなわち十二世紀末葉における榎富庄の莊務組織は、

本家（殷富門院）―預所（民部卿局）―沙汰人（外記入道）

となり、しかもこの組織は寄進の連鎖や荘園形成とは基本的に関係なくかたちづけられたものである。

沙汰人となった外記入道の本名は不詳だが、外記を歴任した中央官人の出身者とみてよからう。かれは尾張国の所領に「常住」していたため、「家中」から相伝譜代の下人である藤原惟光を「定使」に任じ、榎富庄の莊務を託した。こうして沙汰人の職務を担うことになった惟光は、納所として荘園現地からの「国定千余石」に及ぶ年貢等を收納する一方、殷富門院庁や民部卿局の「御家中」の「御相折」にもとづ

く年貢・公事を沙汰し、膨大な中間利潤を得ていたという。さらに惟光は、同じく外記入道が沙汰人をつとめる鎮西住吉荘の「代官」や「伊賀御庄」の莊務にも関与し、これらの得分をあわせて借上を営んでいた。沙汰人による莊務の執行と年貢の請負が複数の莊園にまたがるものであったことを確認しうるとともに、年貢の収納と立替の機能はもとより、それにとりもなう利潤を元手とした借上の経営も含めて、かれらがまさに金融業者的な活動を行っていたことがわかる。

右の史料13で進上された醍醐の家地や和泉の田地なども、そうした活動のなかで獲得されたものであった。前述した平資孝が京都の家地を所有した背景にも同様な状況が想定できよう。さらに資孝も惟光も未進の負物代として、これらの家地・所領の券文を進上する点まで共通しているが、惟光の場合は京都の家地を殷富門院庁の進物所別当に、醍醐の家地と和泉の所領を民部卿局に渡す結果となった。これは院庁と預所に対する沙汰人の請負関係を反映しており、沙汰人の外記入道（実際は下人の惟光）による莊務執行と年貢立替は、預所の家政として行われているのではなく、それとは相対的に独立した中央官人の家政が担うものであったことを明確に示している。外記入道は民部卿局の「乳父」ではあるが、かれの「家中」と女房の「御家中」が明確に区別されていることもそれを裏付けよう。

以上をまとめると、中世荘園における莊務執行の担い手たる沙汰人は中央下級官人であり、かれらによる年貢等の立替システムが機能していた。これを図式化すると、

本家（王家・摂関家）―預所職（貴族・女房・僧侶）―沙汰人（下級官人）

という荘務執行の組織、請負システムの存在が指摘できよう。職の領有者の系列で完結的に荘務が処理されると理解する「職の体系」論は、もはや中世の荘園支配を論ずる際の分析概念としては不適当なのである。

では、王家領や摂関家領の中世荘園で中央下級官人が沙汰人（雑掌）となつて荘務を請け負うのはなぜだろうか。

相当な文筆・計数能力が要求される年貢収納・立替だけでなく、すでに別稿で述べてきたように中世荘園には国領等が「加納余田」として包摂される複合的な荘域構成が一般的であり、国衙への官物并済を請け負っているほか、国領当時の中央官司からの所課をそのまま継承している場合もある。つまり中世荘園は王家や摂関家に対する年貢・公事の納入に一本化された所領ではない。

したがって王家領や摂関家領の中世荘園における荘務権は、年貢賦課、検注、臨時課役（公事）賦課だけでなく、一國平均役の徴収、加納・余田における官物の徴収と国衙への并済、中央官司からの所課物の徴収と納入などが含まれている。その実際の執行者には、荘園領主である王家や摂関家の済例はもとより中央官司や国衙の財政にも通じていることがもとめられる。ここに、預所職に補任される一般の貴族や女房、僧侶などと知遇のある中央下級官人たちが沙汰人として、これらの荘務執行の請負関係を結ぶ理由があった。「大学寮は出なければ」安定的な行政ポストを保證されない大量の中央官人の働き場は、

国衙行政だけでなくそれと密接な関係にある中世荘園の荘務組織にも存在したのである。

近年、院政期から鎌倉期にかけての朝廷財政や国衙財政の実態を掘り下げる研究が急速に進められてきた。そのなかでとくに注目されているのは中央下級官人の活動であり、知行国支配や公事用途の調達等にかれらが目代・并済使・国雑掌などとして重要な役割をはたすことが明らかにされている。しかし中世の荘園制をどのように性格規定するかにもかかわつて、中央官人と荘園経営は並立的・対立的な関係として描かれることはあつても、両者の有機的な関わりを自覚的に問う研究視角は弱かつたといわざるを得ない。

ただし過去の雑掌研究をふりかえると、国雑掌から荘雑掌へという流れを想定する指摘があつたことも事実である。松崎英一・赤松俊秀氏は、荘園の雑掌が国雑掌の仮名である「成安」を仮名とした事例があることに注目し、両者の系譜関係に言及してゐた。近年では網野善彦氏が、荘園では預所が雑掌となる例が多く、「公領における国雑掌と同様の役割を果たした」と述べているが、残念ながらその具体的な分析はない。そこで松崎・赤松氏が注目した肥後国鹿子木荘雑掌成安の文書をみてみよう。

【史料14】僧綱申文紙背文書（『平安遺文』五〇七五号）

肥後国鹿子木御庄雑掌成安解 申請 勝功德院政所裁□

請被殊蒙 恩裁免除、且為阿蘇神人濫行、且依菊池高□不運

上年々御年貢米未□

右、当御庄者狭少第一之处、薄田無双之地也、而寺家所進□□貢者能米二百石・油六斗、為毎年勤之條、已超于傍例、喻如□□殆失治術、而去治承二年之比、依阿蘇神人濫行当庄東郷□□家苧取作田畢、依件訴庄官住人等各令上道、雖訴申寺□□兩年之間不令遂御裁定之刻、乍數下向者也、仍彼治承二年□□油三斗、同三年分卅石・油三斗未済所出来也、彼訴事前執行□□定庄解等在公文所歟、又至于去年御年貢者、為菊池乱逆□□畢、仍雖申下 宮庁御下文無承引之間、使者不帰京之□□使貞能朝臣下向之刻、弥以騒動之故、使者失東西、不及沙□□去年御年貢子細如此者、謂阿蘇神人濫行兩年之分、謂□□押取去年御年貢所積之未進、雜掌何為哉者、被寺□□年々未済併被免除者、將仰正道之貴矣、以解、

養和元年十二月 日

「雜掌成安」

鹿子木莊雜掌は「庄官住人」や「使者」ではなく、在京して莊園領主たる勝功德院政所に年貢未済の免除をもとめている。これは雜掌が年貢を請け負っていたからで、まさにこれまで論じてきた沙汰人に重なる。鹿子木莊では女院の女房が預所職を知行しており、そうした一般の貴族や女房、僧侶が補任される中世莊園の預所は雜掌ではない。むしろ鹿子木莊の雜掌が成安という仮名を用いたのは、かれが沙汰人と同じく國雜掌や目代をつとめる中央下級官人であったからで、國雜掌が國務沙汰人・國沙汰人とも呼ばれるように、莊園の雜掌も沙汰人と同義である。そして、國雜掌や目代をつとめる中央下級官人が中

世莊園の沙汰人・雜掌として莊務を請け負うのは、中世莊園が國領を包摂した複合的莊域構成をとって官物等を弁済したり、國領時代の中世官司等からの所課をそのまま継承しているからである。事実、鹿子木莊は「加納余田」を包摂して十二世紀後葉に國司から「庄内半分」を「収公」されている<sup>⑧</sup>。

中央下級官人を担い手とする沙汰人が十二世紀の院政期から登場するのは、そうした中世莊園の立莊がはじまり定着することに対応したものであったのである。

## おわりに

以上、本稿では立莊研究にもとづく莊務組織論を構築するための基礎作業として、預所職を知行する貴族層と沙汰人が莊務執行の請負關係を結び、そこで年貢立替システムが機能していたことを論じてきた。これまで南北朝・室町期における莊園制支配の特徴として注目されてきた代官請負の構造は、「職の体系」から変質したものではなく、すでに院政期の立莊当初から組み込まれていたものである。ただし院政期はその担い手が商人・金融業者ではなく、中央下級官人であることに時代的な特質があり中世莊園の本質にねざしている。かれらの金融業者的活動の背景には、國衙行政だけでなく莊園支配への関与があり、しかも両者が並列的な別立てではなく有機的に關係していたことが重要である。ひとりの中央官人が双方を兼ねた平資孝などはその象徴的

な事例といえよう。

なお、本稿では在京沙汰人のみを論じて地下沙汰人にふれるところはなかったが、院政期におけるその担い手は国衙の在庁官人層と重なる部分が大いのではないか、という見通しをもっている。十二世紀の史料で在庁官人が「庄官」であったことを確認できるのは伊賀国黒田荘や五箇荘、丹波国大山荘などであり、また播磨国鶴荘と片岡荘の下司職はいずれも在庁官人の桑原氏が掌握している。中世荘園においては、永原慶二氏が備後国大田荘を具体例として論じた、名に代表される国衙領段階の収取体系の継承や、私見で重視するような国衙への官物弁済や中央官司等への負担の存続がある以上、国衙領段階からの「済例」を熟知した実務担当者<sup>④</sup>が現地での荘務沙汰を担うのが自然ではなからうか。この点、下司との関係を含めて今後の課題としたい。

### 【註】

- (1) 永原慶二「荘園制の歴史的位位置」(『日本封建制成立過程の研究』岩波書店一九六一年。初出は一九六〇年)。
- (2) 註(一) 所引永原慶二論文および同「荘園制における職の性格」(『日本中世社会構造の研究』岩波書店、一九七三年。初出は一九六七年)。以下、永原氏の見解はとくにことわらないかぎりこれによる。
- (3) 川端新「荘園制成立史の研究」(思文閣出版、二〇〇〇年)、高橋一樹「中世荘園の形成と『加納』—王家領荘園を中心に—」(『日本史研究』四五二、二〇〇〇年)。
- (4) 中田薫「王朝時代の荘園に関する研究」(『法制史論集』第一巻、岩波書店一九三八年。初出は一九〇六年)。以下、中田氏の見解はこれによる。
- (5) 横道雄「院政時代史論集」(統群書類従完成会、一九九三年)。
- (6) 五味文彦「守護地頭制の展開と武士団」(『岩波講座日本歴史』中世1、一九七五年)。
- (7) 註(3) 所引川端新著書。
- (8) 元暦元年五月日後白河院行下文案(仁和寺文書、『平安遺文』五〇八八号)。
- (9) 保立道久「荘園制支配と都市・農村関係」(『歴史学研究別冊特集 世界史認識における民族と国家』青木書店、一九七八年)。
- (10) 井原今朝男「公家領の収取と領主経済」(『日本中世の国政と家政』校倉書房、一九九五年。初出は一九九一年)。
- (11) たとえば、永万二年□月八日後白河院行下文案(吉田黙氏所蔵文書、『平安遺文』三三八六号)に「去年院使下向之時、勤彼祇候雜事之間、已泥御年貢畢」とある。
- (12) 久留島典子「中世後期の『村請制』について」(『歴史評論』四八八、一九九〇年)。
- (13) 酒井紀美「日本中世の在地社会」(吉川弘文館、一九九九年)。
- (14) 蔵持重裕「日本中世村落社会史の研究」(校倉書房、一九九六年)。
- (15) 心保二年四月八日山村三子重申状(東大寺文書、『平安遺文』三三〇八号)。
- (16) 『玉葉』治承六年八月二日条。なお、源師時は「井於庄遣使雑色常季」わしている(『長秋記』大治五年二月四日条)。
- (17) 田中文英「平氏政権の研究」(思文閣出版、一九九四年)。
- (18) 井原今朝男「東国における摂関家領荘園の構造」(註(10) 所引著書。初出

は一九七六年。

(19) 佐藤健治『中世権門の成立と家政』(吉川弘文館、二〇〇〇年)。

(20) 『兵範記』仁安元年九月二十七日条。

(21) 元久元年四月二十三日九条兼実置文(九条家文書、『鎌倉遺文』一四四八号)。

(22) 田中英英氏は註(17)所引著書でこの『兵範記』の記事をとりあげ、「奉行人」「沙汰人」を区別する見解を示している。

(23) 註(3)所引高橋一樹論文。

(24) 『玉葉』寿永二年三月十七日条。

(25) 『山槐記』治承三年六月二十二日条。

(26) 『山槐記』仁安二年三月一日条など。

(27) 『尊卑分脈』による。

(28) 『兵範記』保元二年十月二十七日条。

(29) 飯沼賢司「職」とイエの成立」(『歴史学研究』五三四、一九八四年)。

(30) 棚橋光男『大系日本の歴史4 王朝の社会』(小学館、一九八八年)。

(31) 川端新「中世初期の国衙と荘園」(報告要旨、『日本史研究』四五二、二〇〇〇年)。

(32) 本郷恵子『中世公家政権の研究』(東京大学出版会、一九九八年)。

(33) 某書状(高野山安養院所蔵普賢延命法紙背文書、『鎌倉遺文』一六四〇号)。  
なお、この文書の作成主体は民部卿局の「御家中」に属する人物と考えられる。

(34) 高橋一樹「荘園公領制」から「中世荘園制」へ」(『歴史評論』六三、二〇〇二年)。

(35) 勝山清次「弁済使」の成立について」(『中世年貢制成立史の研究』塙書

房、一九九五年。初出は一九七五年)、五味文彦「武士と文士の中世」(東

京大学出版会、一九九二年)、白川哲郎「鎌倉時代の国雑掌」(『待兼山論

叢』二七史学篇、一九九三年)、井原今朝男「信濃国小河荘に賦課された

国衙年貢について」(『市誌研究』二、一九九五年)、同「院政期の

地方国衙財政と民部省済事」(『三田中世史研究』三、一九九六年)、註(32)

所引本郷恵子著書など。

(36) 松崎英一「国雑掌の研究」(九州史学』三七・三八・三九合併号、一九六七

年)、赤松俊秀「雑掌について」(『古文書研究』一、一九六八年)。

(37) 網野善彦「日本王権の特質をめぐって」(『年報中世史研究』一八、一九九三

年)。

(38) 治承四年三月日比丘尼清浄解状(僧綱申文紙背文書、『平安遺文』五〇六

四号)。なお、鹿子木荘における雑掌は、むしろ長寛二年十二月二十七日

中原親貞解状(東寺百合文書、『平安遺文』三三三二号)にみえる「地下

預所職」(検校職)ともいう)との関係を検討すべきであろう。

(39) 国雑掌を指す国務沙汰人・国沙汰人の表記は、『玉葉』建久元年十二月十

一日条、『山槐記』治承三年正月二日条、『明月記』建仁元年十月十日条

『吾妻鏡』建久元年四月十九日条・六月二十九日条、文永六年九月二十五

日興福寺大供目代下文(春日神社文書、『鎌倉遺文』一〇五〇一号)など。

(40) 註(38)所引文書および建久六年四月日深賢申状(僧綱申文紙背文書、『新

熊本市史』史料編第二巻古代中世)。

(41) 永原慶二「荘園制解体過程における南北朝内乱期の位置」(註(2)所引著

に関する「考察」(宝月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究』古代中世篇、吉川弘文館、一九六七年)。

- (42) 高橋昌明「平安末内乱期における権力と人民」(『日本史研究』二二四、一九七二年)。天養元年十月二十日鳥羽院行下文案(狩野亨吉蒐集文書、『平安遺文』二五四一号)。高橋敏子「大山荘」(網野善彦他編『講座日本荘園史』8近畿地方の荘園、吉川弘文館、二〇〇一年)。

- (43) 小林基伸「播磨国の開発領主に関する一考察——同国揖保郡の桑原氏をめぐって——」(兵庫県立歴史博物館紀要『塵芥』創刊号、一九八九年)。

- (44) 永原慶二「荘園制支配と中世村落」(註(2)所引著書。初出は一九七三年)。

〔付記〕本稿は二〇〇二年五月に行われた大阪市立大学日本史学会第五回大会での報告ペーパーに補訂を加えて成稿したものである。報告内容の結論の一部は、拙稿「中世荘園の立荘と王家・摂関家」(元木泰雄編『日本の時代史7 院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年十二月)に盛り込んでいるが、詳細な史料分析や「職の体系」論をはじめとする研究史への位置づけは本稿で行っており、拙稿は本稿をふまえたかたちになっていることをおことわりしておきたい。